

# 天王寺村誌

## 總論

### 一、過去と現在

本村の變遷は之を大別して『上古』『中世』及び『現代』の三大時期に劃すべし。而して、前二期は之を一括して、假りに舊天王寺村と稱へ、爾の餘、明治三十年四月一日以降、大正十四年三月三十一日を限る、二十有八箇年間を以て、現在の本村となす。乃ち疆域及び行政上の區劃等幾多の變遷を免かれざりしも、其の舊天王寺村に屬せし時代の如きは、彼の『阿閉島』阿閉島』と呼び『餘戸郷』『荒陵郷』後、四天王寺建立以來、廣く『天王寺』、若は『天王寺村』と稱へ、疆域極めて廣濶なるものたり。従つて、仁德天皇の大いに荒陵(茶臼山を中心とせる天王寺公園一帶の地)の修築を營み賜へるを初めとし。阿閉街道の開通。四天王寺の建立。次で阿倍寺(現本村小字阿部寺)。秋野坊(小野妹子大臣の勅を奉じて建立せしものにして四天王寺の奥院たりしも、今は財團法人大阪聖德會『第五編第五章第八節參照』に移り、爾餘の殿堂は近年東成郡役所に充てられ、更に改築して、現今の大原社會問題研究所となる。伶人町)。降つて一心寺(法然上人開基、逢阪上ノ町)。更に降つて、天王寺村錢座(元文

錢鑄造所<sup>一</sup>廢止後、高津米藏(天王寺御藏とも稱す。御藏跡町)等、本邦稀有の名刹公署を有し。又、人皇第八代孝元天皇の皇子、四道將軍大彥命に阿閉姓を賜はりたる。石橋家(代代孫右衛門と稱し。有名なる天王寺牛市の宰領特權を有したりしも、維新以後廢止。逢阪上ノ町現住)の聖德太子四天王寺建立當時以來の舊家なる。及び藤原家隆卿(夕陽丘)吉田兼好法師(本村小字丸山)。武野紹鷗(本村小字天下茶屋)。竹本義太夫(本名芳松、南堀越町)。同長門大夫(大道三丁目)等名士の舊蹟。及び氣清磨の高土工(堀越神社南方低地一帯)。木村長門守對徳川家康折衝を以て有名なる茶白山(天王寺公園東隣高地)。眞田幸村戰歿の地(安居神社境内)。及び天下茶屋(本村小字天下茶屋)の儼存等を慶ぶ一面に於て、彼の南北朝以來、大阪夏陣に至る星霜實に二百餘年の間、常に戰亂の巷と化し、住民の艱苦亦名狀すべからざるものありたり。而して、新清水(安居神社東北高地)の隆昌、今は其の名のみ流れ。浮づ瀨(同上西邊)福屋(同上)の二大料亭も、亦全く絶滅して俤を存せず。加之、天王寺蕪菁、天王寺大根及び天王寺棉花等、是亦時世の推移と與に、遂に其の實を存せざるに至れり。

然るに、日清、日露兩戰役以後、大阪市の發展に伴ひ、本村も亦俄かに偉大なる發展を將來し、今や人口既に六萬人を超え、村財政亦總收支百貳拾餘萬圓を算するに至り、餘裕尙綽綽たるものあり。乃ち正に中流都市の實力を備へ、懸て『日本一の雄村』たるの優稱を贏ち得るに至れり。

## 二、『天王寺』及び『阿部野』

『天王寺』の稱は推古天皇の元年聖德太子の四天王寺を荒陵の東に建立し給へるに其の端を發す。而して更に其の以前に遡れば『太子傳曆』『四天王寺御手印緣起』には荒陵郷と記し、『大日本史』『國郡誌』には東生郡餘戶郷後に荒陵郷と稱すとあり。即ち本村は古代に在りては餘戶郷と呼び、後、荒陵郷と稱へ、更に四天王寺建立以後に於て廣く『天王寺』と稱するに至れるものの如し。

『阿部野』の稱は元『阿閉』『安倍』等の文字を用ひたり。『阿閉』は崇神天皇の三年、大彥忍信命『阿閉』の姓を賜はるに始まる。而して『阿閉』は後『安倍』と書す、蓋、安倍晴明の祖先にして夙に本地方に據れるに因るか。又古代に在りては『餘戶』と呼べりしを、其の『アマベ』の『マ』を略して『アベ』と稱するに至れりともいへり。而して又淳和天皇の天長二年疫癘(天然痘)大に起り四民困窮を極む。此の時に方り天皇僧空海に勅して阿倍王子權現に祈願せしめ給へるに其の効顯著にして、疫病直に退きければ、天皇爲に『痾免寺』の勅額を賜ひ、爾後痾免寺と呼ばしめ給ふ。この勅額の『痾免』轉訛して『阿倍』と云ひ又『阿部』と呼ばるるに至れりといふ。阿部野の字名上記孰れに其の源を發するや今は遽に斷じ難し、乃ち所説を記して後日に俟つ。

尙、阿倍寺建立の如きは少くとも一千餘年以前の事に屬するに察せば、阿倍家の本地に關係を有せ